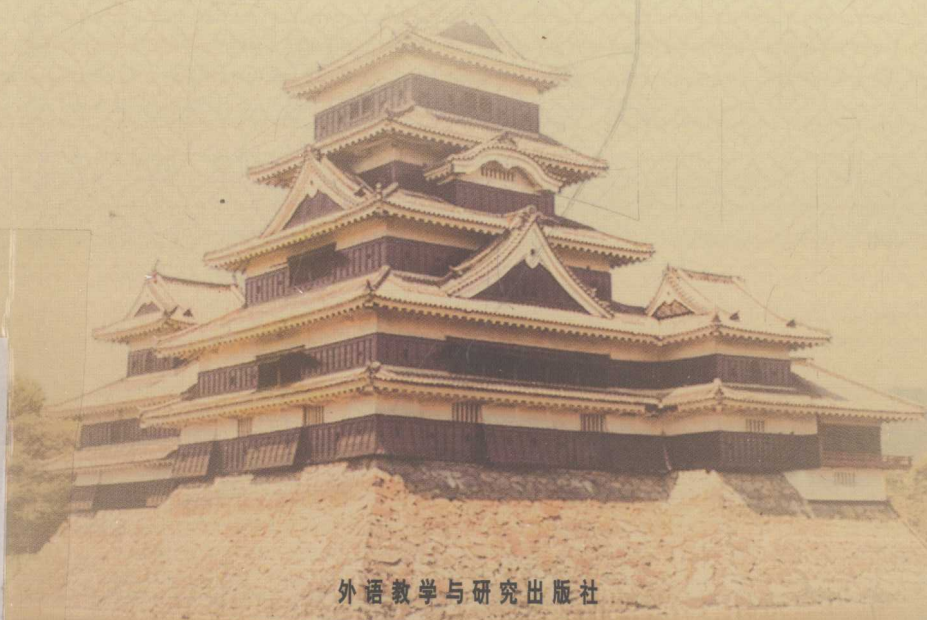


“要求确认” 表现形式的日汉对比研究

张兴 著



外语教学与研究出版社

“要求确认” 表现形式的日汉对比研究

张 兴 著



外语教学与研究出版社
北 京

图书在版编目(CIP)数据

“要求确认”表现形式的日汉对比研究 / 张兴著. — 北京: 外语教学与研究出版社, 2008.5

ISBN 978-7-5600-7544-0

I. 要… II. 张… III. 语法—对比研究—汉语、日语 IV. H364

中国版本图书馆 CIP 数据核字 (2008) 第 071723 号

出版人: 于春迟

责任编辑: 刘 军

封面设计: 刘 冬

版式设计: 黄 蕊

出版发行: 外语教学与研究出版社

社 址: 北京市西三环北路 19 号 (100089)

网 址: <http://www.fltrp.com>

印 刷: 北京京科印刷有限公司

开 本: 850×1168 1/32

印 张: 7.75

版 次: 2008 年 5 月第 1 版 2008 年 5 月第 1 次印刷

书 号: ISBN 978-7-5600-7544-0

定 价: 15.00 元

* * *

如有印刷、装订质量问题出版社负责调换

制售盗版必究 举报查实奖励

版权保护办公室举报电话: (010)88817519

物料号: 175440001

序

本书的作者张兴是北京日本学研究中心硕士课程的毕业生，同时也是北京日本学研究中心博士课程毕业生。从硕士课程到博士课程都一直在北京日本学研究中心就读，并完成学业获得博士学位的学生，到目前为止还为数不多。这是因为在本书作者张兴报考及攻读博士学位的时候，北京日本学研究中心的博士生导师还只有两位。一位是我的前任严安生教授，另一个就是我。而其中可以从日本语言方向招收博士生的也就只有我一个人。从这个意义上来说，张兴是北京日本学研究中心这一中日联合培养人才的教学研究机构较早培养出来的博士研究生中的一个。

无论是在硕士研究生期间还是在博士研究生期间，张兴学习都非常刻苦。他对遇到的任何问题都一丝不苟、精益求精，表现出了一个年轻学子热心研究、追求真理的韧劲儿。本书就是张兴在其博士论文《“要求确认”表现形式的日汉对比研究》的基础上改写而成的。

本书的主要内容是，在“话语管理理论”的基础上，将“标记理论”运用于由句子命题来表示的说话人信息的研究，提出了“信息标记模型”的研究框架，并尝试对现代日语中“だろう”（包括“だろうか”）、“のではないか”、“ではないか”等几个具有表示“要求确认”用法的句尾表现形式进行了系统的研究。同时，还将这些表现形式与一般认为具有相近意义的汉语表现形式“吧”、“是不是”、“不是……吗”等进行了对照比较研究。由于这些表现形式在实际语言运用当中并不是单纯地只表示“要求确认”，即在表示“要求确认”的同时还具有表示其他意义的用法，所以，为了能更好地理解和进一步搞清楚这些表现形式是如何产生出“要求确认”的用法和意义、“要求确认”的这一用法和意义又与其他的用法和意义之间有何必然的联系，本书的作者尝试运用“信息标记模型”，对每一个表现形式都先设定一个最基本的意义，同时围绕着这一基本意义对每一个表现形式的各种用法进行

了充分的描述。通过这些分析和描述，作者发现和指出了许多先行研究中尚未被认识到的用法和现象。如：“だろう”中“表示形成共同认识”的用法、“だろう”和“だろうか”之间不同功能的分布、“ではないか”中“提示判断结果”和“唤起自有信息”的用法、可以用“あるいは”或“それとも”等接续词来连接两个或多个“～ではないか”使用的用法等等。而且，作者还通过借鉴日语中这些表现形式的分析结果，对汉语中的“……吧”、“是不是……”、“不是……吗”等表现形式作了相应的分析和描述。这些研究，对进一步加深和了解语言中表示“要求确认”这一涉及到说话人信息管理内容的表现形式，都起到了积极的作用。本书的出版，无论是对日语或汉语的单语言研究，还是对中日语言的对照比较研究，都将会起到积极的作用。

博士课程毕业以后，张兴回到了自己学习和工作的母校——洛阳外国语学院，积极投身于日语教学的一线工作之中。他把在硕士阶段和博士阶段学习到的学术理论和分析方法运用到自己的教学实践中去，在完成繁忙的教学任务的同时，锲而不舍地不断从事学术研究。每当在各种学术研讨会上遇到张兴，并能听到他的论文发表，或者是在学术刊物上看到他最近完成的学术论文，作为一个曾经指导过他的导师，我都感到无比的欣慰。特别是从去年7月开始，张兴又获得批准，有机会到北京大学外国语言文学博士后科研流动站从事博士后科研课题研究，他可以腾出更多的时间来进行自己的专门课题研究。我相信他一定会在学术研究的殿堂里取得更大的成果。

北京日本学研究中心主任
北京外国语大学教授、博士生导师
徐一平

2006年12月4日于北京

はじめに

類型論的な観点では、日本語はSOVの語順をとり、述語と終助詞の部分が非常に発達している。述語の部分には、ヴォイス、アスペクト、テンス、認めかた、モダリティ等、様々な文法的カテゴリが現れ得る。これらのカテゴリーに関する研究は、現代日本語文法研究の中心であり、焦点でもある。中でも、欧米言語学の中で発達してきたモダリティという概念が日本語の文法研究の中に取り入れられ、日本語の特徴を重視した独特のモダリティ論が誕生した。これは陳述論という日本語伝統的な文に対する研究と相俟って、日本語の文構造に対して一層理解が深まってきた。

この背景のもとで、最近、「だろう」「のではないか」「ではないか」「ね」「よね」等、確認要求の用法を持つ一類の表現形式について研究し、体系付けようとする動きが強くなってきた。しかし、これらの形式は、確認要求という用法しか持っていないのではなく、実に多種多様な用法が存在することが指摘されているが、一つの形式の基本的な意味は何だろうか、この形式の多様な用法はこの基本的な意味からどのように派生してきたのかについてはまだ研究の価値が大きいと思われる。

本書は、「情報のなわ張り理論」と「談話管理理論」に基いて、話し手がどのように文の命題内容による話し手の情報を標示するかという情報標示モデルを提出し、「だろう」「のではないか」「ではないか」及びそれぞれ三者に類似する中国語における“吧”“是不是”“不是……吗”等、確認要求の用法を持つ表現形式について考察を試みた。これらの形式は、確認要求の用法しか持っていないのではなく、実に多種多様な用法が存在する。確認要求用法の派生方法や、確認要求用法とそれ以外の用法との関係を明らかにするために、本書は、各形式の基本的な意味を設定して、この基本的意味から派生してきた様々な用法

を記述し、疑問と判断の接点、「だろう」の「共通認識形成の表明」の用法、「だろう」と「だろうか」の機能分担、「ではないか」の「判断結果の提示」と「自己所有情報の喚起」の用法、「あるいは」或いは「それとも」をもって複数の「のではないか」文を連結できる現象等を指摘した。中でも、蓄積された日本語の豊富な研究成果を利用して、“吧”“是不是”“不是……吗”について分析を試み、各形式の基本的意味を設定し、多様な用法を整理してみた。

本書は、主として「はじめに」と、本論に当たる三部と、「終わりに」によって構成される。

第一部は、本書の分析方法と表現形式の概観であり、第一章の「本書の分析方法」と第二章の「表現形式の概観」から成る。第一章では、情報のなわ張り理論や談話管理理論等に基づいて、話し手は文の中でどのように自分の情報を標示するかという「情報標示モデル」を提出する。第二章では、これまで言われてきた「だろう」「のではないか」「ではないか」という三つの日本語文末表現の用法やその統語的特徴を概観する。

第二部は、日本語における確認要求表現の分析であり、第三章の「直接断定できないことを表す『だろう』」、第四章の「仮説を表す『のではないか』」、第五章の「ギャップを明示する『ではないか』」、第六章の「日本語における確認要求表現の用法のまとめ」という四章からなる。基本と派生の観点から、日本語における確認要求を表す三形式に対して分析する。

第三部は、中国語における確認要求表現の考察であり、第七章「“吧”の用法について」、第八章「“是不是”に関する考察」、第九章「“不是……吗”に対する再考」、第十章「中国語における確認要求表現の用法のまとめ」の四章から成る。第七章、第八章、第九章は、主に「だろう」「のではないか」「ではないか」の中国語における類似表現の意味・用法について分析した上で、それぞれを対比し、類似表現の異同点を明らかにすることを試みる。第十章は、“吧”“是不是”“不

是……吗”といった三表現の用法をまとめる。

最後は、「おわりに」である。ここで、本書で取り上げた日本語と中国語における確認要求表現の用法を最終的にまとめる。

目次

序

はじめに

第一部 本書の分析方法と表現形式の概観

第一章 本書の分析方法	2
1. はじめに	2
2. 文の表現類型と確認要求を表す文との関係	2
3. 文の基本的意味構造とモダリティの機能移行	5
4. 本書における確認要求用法の派生方法	7
5. おわりに	21
第二章 表現形式の概観	23
1. はじめに	23
2. 「だろう」について	23
3. 「のではないか」と「ではないか」について	29
4. おわりに	37

第二部 日本語における確認要求表現の用法について

第三章 直接断定できないことを表す「だろう」	40
1. はじめに	40
2. 「だろう」の各用法	40
3. 「だろう」への統一的な解釈の試み	49
4. おわりに	56
第四章 仮説を表す「のではないか」	57
1. はじめに	57

2. 先行研究と本稿の立場	57
3. 「のではないか」の用法	59
4. 「だろうか」との対比	68
5. おわりに	73
第五章 ギャップを明示する「ではないか」	74
1. はじめに	74
2. 問題の提起	74
3. 分析	75
4. 「ではないか」の構造に関する仮説	91
5. おわりに	93
第六章 日本語における確認要求表現の用法のまとめ	94
1. はじめに	94
2. 先行研究	94
3. 「だろう」「のではないか」「ではないか」の確認要求用法	94
4. おわりに	100
 第三部 中国語における確認要求表現の用法について	
第七章 “吧”の用法について	102
1. はじめに	102
2. 先行研究	102
3. “吧”の用法について	105
4. “吧”の意味	118
5. 「だろう」との対照	121
6. おわりに	133
第八章 “是不是”に関する考察	135
1. はじめに	135
2. “是不是”に関する先行研究	136
3. 三種類の“是不是”	137

4. 第三類の“是不是”について	146
5. 「のではないか」との対照	151
6. おわりに	156
第九章 “不是……吗”に対する再考	157
1. はじめに	157
2. “不是……吗”に関する研究	157
3. “不是……吗”の分析	160
4. 各用法の関係及び“不是……吗”の成立に対する仮説	175
5. 「ではないか」との対照	177
6. おわりに	188
第十章 中国語における確認要求表現の用法のまとめ	189
1. はじめに	189
2. “吧” “是不是” “不是……吗”の諸用法	189
3. “吧” “是不是” “不是……吗”の用法間の相互関係	192
4. おわりに	200
おわりに	201
1. 類似する形式の対照結果のまとめ	201
2. 確認要求を表す場合	204
3. 情報標示モデルによるまとめ	206
4. 今後の研究課題	207
用例と訳文の出典	210
参考文献	217
后 记	235

第一部 本書の公称方法

第一部

本書の分析方法 と表現形式の概観

第一章 本書の分析方法

1. はじめに

本章では、まず確認要求の文¹と平叙文(述べ立て文)や疑問文(問いかけ文)の関係について検討し、文の意味構造およびこれまでモダリティの機能移行と呼ばれている現象や談話の情報領域に関する研究について紹介する。そして、それらに基いて、本書の記述の枠組みとして、「情報標示モデル」という概念を提出する。

2. 文の表現類型と確認要求を表す文との関係

文の表現類型に関する研究は日本語文法研究の大きな基礎問題である。伝統的な分類としては、平叙文、疑問文、命令文、感嘆文がある。1980年代から、国語学の陳述論を踏まえて、一般言語学の概念としてのモダリティという術語が取り入れられ、新しい日本語文法研究の理論として日本語のモダリティ論が誕生した。文の表現類型もモダリティという枠組で検討されるようになってきている。ここで、よく知られている仁田(1989、1991)を紹介する。

仁田(1989、1991)は、人称制限や文法的なカテゴリーの分化の仕方等をもとにして、発話・伝達のモダリティの観点から日本語の述語文の類型を次のように立てている。(番号は本章による。以下同)

- (1) ①働き掛け ①' 命令(こちらへこい)
①” 誘い掛け(一緒に食べましょう)
- ②表出
- ②' 意志・希望(今年こそ頑張ろう／水が飲みたい)

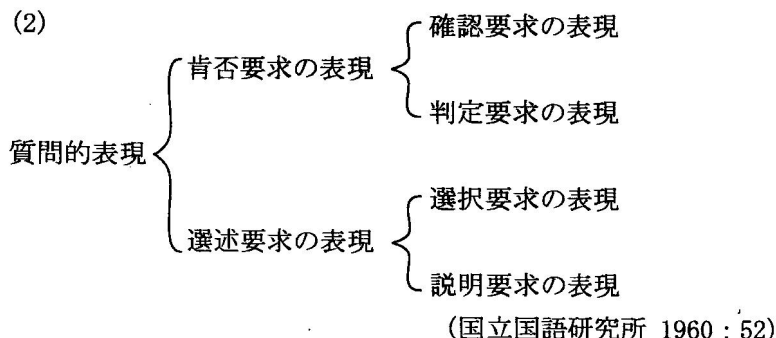
1 仁田(1987)は、本書の「確認要求」を「疑似疑問」と呼んでいる。

- ②” 願望(明日天気になあれ)
- ③述べ立て ③’ 現象描写文(子供が運動場で遊んでいる)
- ③” 判断文(彼が評議員に選ばれた)
- ④問いかけ ④’ 判断の問いかけ(彼は大学生ですか)
- ④” 情意・意向の問いかけ(水が飲みたいの／こちから電話しましょうか) (仁田1991: 22)

周知のとおり、述べ立て文(広義の意味では平叙文)と問いかけ文(広義の意味では疑問文)は、これまで文類型として排他的で対立したものと捉えられてきたが、しかし、発話行為理論(Tsuchibashi 1983、Gibón 1990)やプロトタイプ理論(益岡隆志 1987)等の研究によって、両者は典型的な述べ立て文と典型的な問いかけ文を両端として、両者の間には様々な程度の中間的なものが存在している、と考えられるようになってきた。

日本語においては、確認要求の文は、述べ立て文と問いかけ文の間に位置する中間的な発話行為であり、話し手は自分の考えを述べつつ、同時に相手の反応を求める機能を持つものである。つまり、単なる述べ立て文でも問いかけ文でもなく、同時に述べ立て文の一部分の性質と問いかけ文の一部分の性質両方を持つものである。典型的な表現形式としては、「だろう」「のではないか」「ではないか」「ね」「よね」等がある。聞き手から情報を要求する側面から、確認要求の文は、平叙文よりも疑問文のほうに近い。この現象は、日本語学において国立国語研究所(1960)によって早くから指摘されている。国立国語研究所(1960)では、「要求表現は、いわゆる『質問文』『命令文』の総称であって、要求するものが相手の返答であるものを、『質問的表現』とし、要求するものが相手の行為であるものを『命令的表現』として二分した」として、その共通性としての要求に着目し、「要求表現」として一括している。

下図は、国立国語研究所(1960)での質問的表現の分類の仕方である。



安達(1999)は、「これは、いち早く『表現意図』という伝達論的な観点を導入した点で、後年の発話行為理論(Speech Act Theory)の先駆けとも言える優れた研究である」として高く評価している。

また、確認要求の表現については、国立国語研究所(1960)では、次のように規定している。

- (3) 確認要求の表現というのは、話し手が自己の判断について、相手の確認を求めることの明瞭な表現であって、その点、判叙表現の文末に「ネ」「ナ」などの終助詞をともなうものと、意味的にも形式的にも、よく似たものがあるが、そのほか、「～ダロウ?」「～デショウ?」「～ジャナイ?」「～ジャナイカ?」という文末助辞をともなう形式がある。「～ダロウ」「～デショウ」の、推定の表現を、推量という断定の一種と見たのは、この、確認要求での判断の内的存在と相関する。(国立国語研究所 1960 : 109)

確認要求に対する論述の中では、これが早期的かつ明瞭な規定であると言える。本書の研究対象としている確認要求の位置づけとしては、国立国語研究所(1960)の提案に基本的に従う。

国立国語研究所(1960)のほか、明らかに、確認という名称を用いて研究している論文としては、田野村(1988、1990)、安達(1990、1999)、鄭(1992、1994)、宮崎(1993、1996、1998、1999、2000)、三宅(1994、1996)、宮崎ほか(2002)等がある。宮崎(2000)では、確認要

求について、次のように述べている。¹

- (4) 確認要求とは、典型的には、聞き手に依存して情報の確実化を図る行為と定義できるが、「デハナイカ」には、そうした「聞き手依存性」がなく、その確認要求機能は、話し手の認識に聞き手の認識を同一化させるべく「聞き手を誘導する」というものである。(宮崎 2000 : 7)

つまり、宮崎(2000)は、主な確認要求表現を、確認要求と呼ばれている言語行為の内実という点で、聞き手依存型の「だろう」「のではないか」「ね」と、聞き手誘導型の「ではないか」に類別している。宮崎ほか(2002)にもそれに近い論述が見られる。

本書では、国立国語研究所(1960)や宮崎(2000)等に基づいて、確認要求を次のように規定する。

- (5) 確認要求とは、話し手が聞き手に依存して情報の確実化をはかったり、聞き手に共通認識の形成を求めたりする言語行為である。

つまり、確認要求には、話し手にとって明らかではない命題が正しいことについて、情報を持っている聞き手に確認を求めるタイプと、現場における聞き手の認識について確認を求めることによって共通認識の形成を達成させるタイプといった二種類がある。

3. 文の基本的意味構造とモダリティの機能移行

ここで、文の基本的意味構造とモダリティの機能移行によって確認要求用法が派生する方法を紹介する。

3.1 文の基本的意味構造

1 宮崎(2000)では、「だろう」「ね」「のではないか」「ではないか」を<事実性の傾き>を有する確認要求形式と、「だろうね」「よね」「のではないだろうね」「ではなかったか」を<当然性の傾き>を有する確認要求形式としている。本書では、「だろう」「のではないか」「ではないか」だけを取り扱う。

人間は言語を用いて思考や伝達等の機能を実現している。このような活動を言語行動という。文は言語行動の基本的単位で、言語機能を実現するための構造を持っている。

これまでの研究によると、日本語の文の基本的な意味構造は、次のような層状構造を有している。

(6) 命題 モダリティ

命題とは、文の中で客観的な内容を表す部分である。モダリティとは、文の中で客観的な内容や聞き手に対する発話時における話し手の主観的な態度を表す部分である。

モダリティと呼ばれている部分は、さらに命題内容に対する話し手の捉え方を表す命題指向のモダリティと、聞き手に対する発話・伝達のモダリティに分けられる。発話・伝達のモダリティは命題指向のモダリティを包含する形で存在している。

(7) 命題 命題指向のモダリティ 発話・伝達のモダリティ

3.2 モダリティの移行現象

対話状況の中で命題指向のモダリティがどのように発話・伝達のモダリティに移行するかという現象に関する研究は、仁田(1992、2000)、安達(1989)等がある。

仁田(1992)は、「言語の機能といった観点から、主に徴候の元での推し量りを表すモダリティ形式((シ)ソウダ、ヨウダ、ラシイ)について、判断的な意味から発話・伝達的な意味へと移っていく現象、つま